假名垣魯文—人と作品

（西洋道中膝栗毛を中心として）

小林智賀平

仮名垣魯文（谷中永久寺の猫塚わきの碑銘によれば、かながきろぶむ）は、文政十二年（一八二九年）すなわち十返舎一九の死ぬ二年前であるが、この年の正月六日、京橋槍屋町の魚屋の悴（三男一女中の長男）として生れた。（なお、伝記の資料については、論考末尾につけた研究書目を参照のこと。）魯文の実家は、二代前までは代々相模国藤沢在の百姓であったが、祖父の時に鍬鍛冶職に転じた。魯文の姓は野崎といい、幼名は兼吉、後に庫七とかえたが、ふつう文蔵として知られている。父は左吉といい、家運を挽回するため、一家をあげて上京し、京橋に魚屋を開いたのである。左吉は尋常普通の魚屋と違い、俳諧をよくし、（後にあげる「名田面赤本」に、梶葉こと左吉の作品もあがっている）、また絵の嗜みもあり、みずから星窓梶葉と号していた。それでこの父親は、わが子のしつけにかなり意を払ったらしく、幼い兼吉（魯文）にいろはの手習を始め、「実語教」や「童子教」などを、暗んじさせたといわれる。このようにして魯文の文才は、まず父親によって、幼年時代に培かわれていったようである。

天保八年（一八三七年）魯文九歳の時、家が貧しかったので、兼吉は新橋竹川町三十間堀の諸藩御用達鳥羽屋こと、三村多吉方に十年の年期で、丁稚奉公に出された。ここでは、みにくい顔付のため、鳥羽絵小僧という渾名をつけられた。このころから魯文は、小遣銭をはたいて、合巻物（文化以後に江戸で出した草双紙で、三冊物や四冊物を合本として、極

彩色の絵表紙をつけて売った、絵入の長篇小説）を買い求め、十返舎一九、式亭三馬、山東京傳などの戯作物（江戸後期に出た読本・酒落本・黄表紙・滑稽本・人情本などの、小説のこと）に読みふけった。さて、この鳥羽屋主人の姉が、新橋山城町の酒屋津国屋藤兵衛の後妻として、嫁していた。この藤兵衛は龍池と号し、通人として世に知られていたが、先妻との間にできた息子藤次郎（幼名子之助）は、それに輪をかけた道楽者で、細木香以と号し、江戸末から明治にかけての大通の一人であった。（香以については、「森鷗外全集」第七巻「細木香以」の項を参照。なお細木は「さいき」がふつうであるが、鷗外は「ほそき」と読ませている。）香以は世間ではふつう「津藤」（津国屋藤次郎）で通っていたが、為永春水の「梅ごよみ」の千藤（千葉の藤兵衛）を始め、春水のほかの人情本によく出てくる、金持で、わけ知りで、相愛の男女を救いだす「津藤」は、この香以がモデルであった、といわれるが、年代と年令からいって多少問題である。さて放蕩三昧の末、香以はお定まりの勘当となり、継母の三村方に預けられたが、そこで同家の丁稚兼吉と魯文と、顔見知りになったわけである。この時分の笑話に、主人鳥羽屋多吉が土蔵に大切に隠しておいた葛籠を、金でも入っているかと、香以と兼吉が盗みだして開けてみると、意外や板おろしの春画であった。そこで早速二人は、つぎの狂歌を読んだ、と伝えられている。

昔し〳〵有つた土佐絵の笑ひ本
咄しの種に残るをかしさ　（魯文）

化物が出るとも知らず背負ひだせし
おもい葛籠の欲の張抜き　（香以）

こうして魯文は、この道楽者で通人の若主人から、眼をかけられるようになっていった。それで香以が相変らず茶屋遊び

をする時は、いつも兼吉がお供をした。こうして可愛がられてゆくうちに、魯文は香以から俳諧の手ほどきをうけるようになった。さらにその引合わせで、俳諧師涼窓露蔦についても習い、鳳子（香雨亭）応一という俳号をうけた。さらにまた狂歌を、三世千種庵諸持（宇治柴文斎）に習うようになって、狂名を斜月窓諸兄と称した。こうしたことが縁となって、魯文はだんだんと戯作者や俳諧師などと、近づきになっていった。そして魯文は、戯作者になろうとする宿志をますます固めていった。また其角の起した江戸座風の俳諧で、そのころすでに一派をなしていた、米羅坊こと野村守一についても修業をはげんでいった。

また天保十四年（一八四三年、この年為永春水歿す）十五歳の時、魯文は香以・露蔦・守一の口添えで、狂言作者、戯作者として当時有名な花笠（こと東條）魯介（文京と号す）の門に入り、和堂珍海と名乗って、宿願の戯作にうちこむことになった。そして翌弘化元年（一八四四年、十六歳）には、師匠の名をもらって、英魯文と改名し、「政談青砥碑」という草双紙をかいた。これが、魯文の処女作である。なお魯文は後また、鈍亭魯文とも号した。さて嘉永二年（一八四九年、二十一歳）魯文は、いよいよ戯名の披露をすることになった。そして当時の有名な戯作者や狂言作者、狂歌師たちから、お祝いの狂歌や俳句をもらったので、これを一冊にまとめ、「名所面赤本」（四六版大十頁、上野図書館蔵）という題をつけて、摺本にし、友人たちに配っている。またこのころから魯文は、戯作者として大成するため体験をひろめよう、という下心もあって、花柳界に出没することになったが、ついに血気にまかせて遊蕩を重ね、ついに主人多吉から叱責されることになった。そこで魯文は心機一転、いよいよ本格的に戯作の修業にうちこもうと決心して、主家をとびだしてしまった。そして一旦相州萩園村にある本家を頼って、しばらくそこに厄介になったが、その世話で、南須賀村の真楽寺に奉公することになった。しかし一度遊びに身を持ちくずした魯文には、きゅうくつな寺勤めの長続きするはずはな

く、とうとう不真面目をとがめられて、またここを追い出されてしまった。とど魯文は、尾羽打ち枯した姿で、また江戸へ舞いもどってきた。そしてこんどは縁あって、逗油町にある藤岡屋慶次郎という本屋に住みこむことになった。しかし魯文は、肝心の店番の方はおろそかにして、売物の本に読みふける、という始末であったから、容あしらいのよかろうはずはなく、店先の本を盗まれるというしくじりも度重なって、またも主家を追い出されることになった。

それで魯文はしかたなく、知人を頼ってしばらくは、あちこちと渡りあるいていった。そして一時は、武蔵屋良助という者につれられて、上総にゆき、博徒の手先となったり、また花簪を売って日光くんだりまで旅したこともある。そのうち旅先で、八丁堀の瓦版師の吉と虎屋倉吉と相知った。そして勧められて、当時流行っていた鈴木主水のヤンレ節という小唄にまねて、「亜米利口説ヤンレ節」（嘉永四年版）というのを作って、瓦版にした。これを手始めに、「質屋雑談融通軍記」「佐倉宗吾一代記」のほか、「東紫哇文庫」という合巻物を書いた。これはたちまち世人の喝采をうけて、さかんに読まれた。そして瓦版を読売するために、魯文はみずから街に出て、編笠大道軒と号して呼びあるいた。そして引きづつき、人形町の品川屋久助という本屋から、合巻物の注文をうけるようになり、魯文の名はようやく江戸市中に弘まることになった。時に彼の二十三、四歳のころであった。そこで魯文は、虎屋と石川屋の援助をうけて、湯島の妻恋坂の、妻恋稲荷の近くに野孤庵と称する家を構え、

談笑諷課
滑稽道場　御誂案文認所　江戸
作者　鈍亭魯文

という看板をかかげて、戯作に従うことになった。時に嘉永六年（一八五三年）魯文の二十五歳の時である。そしてこの妻恋坂時代は、魯文の修業時代にあたるのであって、戯作だけでは喰えないので、道具類も商った。そして一時、骨董屋雅楽という戯号を名乗ったこともあった。このころ、ちようど妻恋坂下にいた旗本酒井新三郎の妾の妹よしをめとった。

この妻恋坂時代の狂歌に、

白妙を肌にきつねの皮ごろも
雪やこん〳〵妻恋の里

というのがある。

さて、安政二年（一八五五年）十二月二日あの有名な安政の大地震が起ると、画家として名の売れた猩々（河鍋）暁斎に絵をかかせて、一枚刷の版画を売りだした。これは羽の生えるようによく売れて、際物作家たる魯文の本領を、よく発揮した。ついで安政四年（一八五七年）には、一恵斎芳幾に絵をかかせて、「操松月景清」という戯作を出したが、これはなかなかの上出来で、戯作者としての魯文の地位が、ここに確立した。

万延元年（一八六〇年、三十二歳）魯文は、数人の仲間と連れだって富士山に登り、帰りに箱根七湯をめぐったが、これにもとずいて、「滑稽富士詣」（十巻、文久元年刊）という戯作を出した。これは、同行者が富士詣りの旅先で、実地に演じた滑稽諧謔を、そのまま書き写したものであるが、まさに大ヒットとなり、魯文の出世作となった。そして世人からは、今三馬とほめられるようになった。これに力をえて魯文は、こんどは滑稽物に筆を揮うことになった。ところがたまたまこのころ、初代柳亭種彦の作「正本製」（文久年間刊）の三編に、歌川豊国がかいた挿絵のうちに、赤本入道仮名垣という坊主の絵があったが、それが魯文の顔に生き写しであったので、それ以来魯文は、鈍亭の戯号を改めて、仮名垣魯文と名乗るようになった。なお万延元年ごろには、岳亭散人と号して、「流行楢漬拳」、「相模甚九」のような流行唄の絵入本を、出したこともあった。そして、仮名垣魯文という新しい戯号を使って、「劇場繁昌記」（文久元年）、「童絵解万国噺」（同年）を始め、「黄金花猫目鑑」、「仮名手本忠臣蔵」（慶応三年）のほか、「玉菊物語」、「猿馬鹿三番相」、「浮世見物

左衛門」、「近世支那事情」、「百猫画譜」、「三題楽話作者評判記」、「万国人物盡」などを、この二、三年のうちに、つぎつぎに出していった。そして文名ようやくあがり、金の工面もすこしはつくようになったので、文久二年春には、日本橋亀井町へ移ったが、この年七月に妻よしに死なれた。それから四年には、神田久右衛門町へ引越した。その借家は、河竹默阿弥が家主であって、魯文と默阿弥との深い交りは、このようにして、結ばれていった。そのうち默阿弥が一肌ぬいでくれて、魯文は後妻ためを遊里から根引いて、迎えることができた。その後さらに慶応三年には、浅草馬道の寢釈迦堂（一名いろは長屋）に、引越すことになった。長い間魯文を世話してくれた香以山人が零落して、慶応の始め下総の寒川へ隱退したので、このころの魯文は、著作の收入だけでは、暮し向きが楽でなかった。それで一時は、牛胆煉薬黒牡丹というのを売ったこともあり、その際三馬の故智にならって、自分の本の中でこの薬のことを宣伝している（「西洋道中膝栗毛」五編上序文）。さて、この寢釈迦堂にはそのころ、昔馴染の河竹默阿弥や福地桜痴などが住んでおり、魯文は桜痴とは特に親しく附きあったので、そこには文学的な雰囲気が、かもしだされていった、と考えられる。

このようにして魯文は、御一新の時代に入ってゆく。明治元年は一八六八年、つまり今から八十五年前で、魯文はちょうどその時四十歳であった。この年、一人で二つ以上の名前を使うことを禁じるお布告が出たので、魯文は本名を廃して、以後もっぱら魯文の通称を使うようにした。さて明治初年は、政治・経済・文化など、あらゆる分野にわたって、旧秩序が瓦解し、まさに「火より水へ」の大変革であった。しかしこれに代るべき新しい秩序制度は、まだ充分にはできあがらず、万事混沌たる状態であった。西洋の新制度は、さながら怒濤のように押しよせてきたが、旧制度の余燼はまだ消えやらず、また新しいものは、まだ充分にこなしきれなかったのである。したがって、新旧の両制度や思想は、たがいに衝突し、万事が葛藤の渦中にあったわけである。ところで新時代を背負ってたつ、新鋭気壮の知識階級の者は、もちろん

文明開化を謳歌したが、彼らは福沢諭吉などの唱える実学主義におちいって、ともすれば文学・精神文化を軽んずる傾向があった。それで文学に関するかぎり、大体からいって、徳川以来から、支那流の文学観が支配していたから、文学といえば詩歌であって、稗史小説の類は、とかく軽視されがちであった。したがって、文学の一ジャンルとしての小説は、二十年前後の末広鉄腸の「雲中梅」や、二葉亭四迷の「平凡」までは、発生しなかったのである。このような情勢の中にあっては、小説に準じる文学形式としては、わずかに徳川以来の読本、草双紙の系列に属する戯作物が、あるのみであった。ところが、文学の系統からいっても、また内容形式からいっても、戯作物は低俗のそしりをまぬがれず、戯作者自身もひたすら読者に媚びる賤業の徒と、みずからを卑しめていたほどであった。したがって、戯作物が文学的には価値が低かったことは、いうまでもないのである。例えば、式亭三馬も、

詩も知らず歌ももちろんしらぬひの
尽すたわけも戯作者の徳

と詠って、戯作の低俗をみずから認めてかかっていたほどであった。このようにして、明治御一新に当り、諸事万端古きを捨てて、新しきに向う折から、ひとり戯作文学者のみは、旧態依然として、小手先の技巧をもって、浮世を茶化し、酒落のめしていったのである。したがって、この種の戯作物には新時代にふさわしい独創性など、望むべくもなかったわけである。

このような戯作者の中にあっては、魯文もまた低俗さをまぬがれなかったが、彼は慧眼よく新時代の雰囲気を察し、このめまぐるしい過渡的時代に迎合する、鋭い感受性の持ち合わせもあったから、他に先んじて開化期の突飛的な新しい世相に着目して、彼独特の才気を揮ってこれを描き、新生面の開拓に当ったのである。しかし前にも述べたように、魯文の

文学的教養は結局、戯作者流の域を脱せず、また時すでに初老の域に入っていたので、まったく新しい境地を開くことはできなかった。わずかに、文明開化の新時代を讃仰するかたわら、混沌たる世相の嘲罵に、鋭い筆をむけたのみである。ここに、過渡期の作家としての、魯文のもつ文学的意義がある、といってよかろう。

明治三年（一八七〇年）に「娼妓評判記」を出したが、その巻頭に「苦界文盡」という唄をそえている。これは、前年の明治二年に出た福沢の「世界国盡」をもじったパロディである。いまこれをくらべてみると、つぎのようになる。

世界国盡　慶応義塾　福沢諭吉著	苦界ふみ盡　契応妓塾　福沢魯吉著
世界は広し万国は	苦界は憂し間夫客は
おほしといへど大凡	多しといへど大凡そ
五に分けし名目は	五に分けし町目は
「亜細亜」「阿弗利加」「欧羅巴」	揚屋角京新町と
北と南の「亜米利加」に	西と東の江戸町に
堺かぎりて五大州	境かぎりて阿茶屋洲

また一方ではこれとは逆のゆき方をして「三則教の捷経」という七五調を主とした韻文で書いたものがあるが、これにもまた戯作的調子がうかがわれる。

さて、彼の代表作として誰しもあげる「西洋道中膝栗毛」（明治三年以降）、「牛肉雑談安愚楽鍋」（明治四年）のほか、「倭国字西洋文庫」（明治五年八冊、紅木堂）、さらに福沢の物理学初歩ともいうべき「窮理図解」をもじった「虚八百胡瓜遣」（明治五年二冊、万笈閣）などの開化物は、このようにして魯文の経験迦堂時代にできた作品である。いずれも諷刺

の筆を自由に揮って、当時の諸事万端欧米模倣の、笑劇的な世相を描き出している。

まず「安愚楽鍋」は、三編五冊からなり、始めの三冊は明治四年に、後の二冊は五年に、小判和装で、一恵斎芳幾の挿絵を入れて、誠之堂から刊行された。実はすでに、「膝栗毛」の六篇でこの「安愚楽鍋」の第一章『書生の酔話』の全篇をかかげて、この本を予告している。ただしこの『書生の酔話』の所は、実際に出た「安愚楽鍋」にはのっていない。この本は一名を、「奴論建」という。これはオランダ語で、酒に酔っぱらった状態をいう言葉である。このころから牛肉を賞美する風がはやり、「士農工商老若男女、賢愚貧富おしなべて、牛鍋食はねば開化不進奴」というわけで、牛肉屋がさかんに繁昌した（石井研「堂明治事物起原」大正十五年春陽堂版参照）。なお、明治五年には明治天皇も膳宰に牛肉を用いられた、とある。それで、牛肉屋に集る当時の各階級の人物をとらえて、その断片的な小話を集め、その中で開化期のいろいろな人物の性格や意見を写しだしたもので、まさにこれは、式亭三馬の「浮世風呂」や「浮世床」をしのばせる構想である。ただし三馬物のように、対話の体裁になっているのはごく少数で、多くは一人一人の独白の形式をかりて、開化期の世相をもっとも写実的に描いてゆく。また内容の方面からいっても、三馬の「醒酔久質」などが、「安愚楽鍋」の直接の粉本となったようである。ここで注意すべきは、魯文はこの書を、作中の一人物英通次郎の作という体にして、この通次郎が仲間の弥次などに、読んで聞かせる構想にしていることである。この通次郎は通弁を職とし、したがって西洋の事情にすこしは通じ、あやしげな英語をあやつっている。開化期によくある、半可通である。おそらく魯文は、この通次郎をもって、開化人たるおのれの傀儡としたものであろう。そしてこの通次郎は、後にまた「西洋道中膝栗毛」の中でも脇役として、活躍することになっている。結局この人物は、開化期の西洋崇拝熱に酔いしれている、民衆の浮足振を示す、好個の戯画と見れないであろうか。この種の諷刺的世相物としては、すでに三馬の書いた「早変胸機関」、「例之酒癖一盃綺言」、

「古今百馬鹿」などがあり、いずれもこのような体裁になっているが、その出来ばえは「安愚楽鍋」にはおよばない。いろいろな意味で「安愚楽鍋」は、開化期の世相をもっとも写実的に描いたものとして、明治初期文学の代表とされている。

つぎに「膝栗毛」の方は、「万国航海西洋道中膝栗毛」という長い題になっており、十五編三十冊からなり、明治三年に本石町にあった、万笈閣という当時有名な本屋、碗屋から初編を刊行し、五年に第十一編まで出した。以上で計二十三冊となる。さらに七年には、第十二編以後を、友人の鉄径道人、七杉子総生寛（姓は岩橋、下総の生れゆえ総生と名のる。「千変万化世界大演劇一幕噺」、「文明膝栗毛」のほか、「滑稽演説会」という雑誌も出している。）が代作をして、後をつづけ、九年にいたってやっと全十五編となって、完結している。なお口絵と挿絵は、落合芳幾、三世広重、猩々暁斎などの筆になる。なお代作の件は、十一編終りのところで、「航開進みて開化の域に着せんとする十二経、元来作者は不知案内、浮雲瀬戸を越えんより、此辺で乗換させんと、亜欧の境ひを区分にて、地理に明るき寛先生を、頼むは太平海上無事に米国まで乗切らせんと、慮ふは不佞が水母の蝦眼」と、ことわっている通りである。このような西洋道中物を、洋行一つしたことのない魯文が物することのできたのは、福沢諭吉の著書、ことに「西洋旅案内」があったおかげである。これに関しては、すでに「西洋道中膝栗毛」初編の凡例で、「近世福沢先生を始め諸々の洋学先生が、著述されし飜訳の書とぼしからねば、其階梯にとりつきて大略お茶を濁すものなり」とも述べ、また四編の続例で、「繹は西洋旅案内を柱とし趣向は友人砂燕子が航海の日記を礎とせり」と、正直にことわっている。また、二編に出てくる手水台（ウツシスタド）や、三編のベットステッドのように、同じく福沢の「西洋衣食住」から借りたものもある。しかし本の結構は、題の示すように、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の様式を、そっくりまねして、三世弥次郎兵衛と喜多八が、横浜の豪商大腹屋広蔵に連れられて、上海・香港・サイゴン・シンガポウル・ピナン・セイロン・アデン・スエズ・カイロ・アレキサンデリ

ヤ・メシナ・マルセイル・パリス・マルタ・ジブラルタル・サウスアンプトンを経て、英京龍動に渡航し、途中いろいろの失敗を重ねながらも、万事を茶化し、酒落のめして、やっと日出度く帰国する、という道中双六の趣向になっている。この本の中に度々出てくる失敗談は、一九の「膝栗毛」にちょっと似てはいるが、一九の弥次・北八は、江戸子の誇で、田舎者を見下していたから、しくじってもどこかそこに、優越感がともなっていた。ところが魯文の弥次・喜多は、未開の倭人が外国で失敗して、国辱を海外にさらす、という惨憺たるものになっている。なお魯文は、言葉のセンスのあった戯作者で、同じような酒落を使うにしても、開化期の流行語を入れた酒落を、巧みに使っている。いまこの種の駄酒落の一端をうかがうと、

「この頃漢語図解なんぞ捻り廻して人参具足だ」

「ヲット待ったり因循姑息の半駄郎」

「最午刻だぜチト腹が北アメリカだ」

といった塩梅で、一九の弥次・北八の歯切のよい江戸前のたんかの代りに、ここには開化期の臭みが鼻につく。このような半可通の外国名を、やたらにふりまわした一段を拾うと、

「雪の普魯西も扨アメリカも馬車で通ふてインギリス。僕はこれほどホルトガル。君はいつでも仏蘭西か。浮世のギリシヤとただ印度。床をトルコの一つ夜着。エジプトこちらへよらしゃんせ。チャイナ〳〵ととりすがり、オロシヤに見えるが恋の路、ハアトッチリトン……」

といった塩梅で、その趣向は、滝亭鯉丈の「花暦八笑人」や、梅亭金鶴の「七偏人」などの滑稽本に出てくる口合と、たんら変るところがない。また失敗の茶番趣味については、例えば便器の水を飲んで笑われたり、婦人に握手されて陋想さ

れたと自惚れたり、万事きわめて卑俗な趣味をもって描かれている。そしてこれは、「八笑人」や「七偏人」以来の滑稽本のもつ、低俗趣味を、魯文もまた受け継いでいたからである。同じ西洋道中にともなう失敗談でも、明治中期以後になると、例えば末広鉄腸の「唖の旅行」や、益田太郎冠者の「唖の旅行」という脚本などでは、この種の低俗性がなくなっている。

なおここで注意すべきは、魯文が「膝栗毛」の中で、先達の京傳・一九・馬琴・三馬の月旦を試みていることである。まず馬琴は、戯作の本義を忘れて、いたずらに衒学に走ったといって、これをけなした。また京傳の黄表紙の滑稽は可とするも、その骨董趣味の考証を排し、結局彼の功罪は半ばする、と断じた。それから一九の虚で捏ねあげた趣向はよしとするも、その狂言風な創作態度は非として、これを斥けている。ひとり三馬は、虚中に実地をうがち、人情世態を描きつくし、滑稽酒脱、これこそ真の戯作者の道である、とほめている。それで魯文みずからは、一九の妙と三馬の奇とをあわせかねよう、と心がけたのである。そんなわけで、明治十年ごろ「東京絵入新聞」へ寄稿する時も、魯文はわざわざ赤神三馬という戯名を使っているほどである。このようにして、江戸伝来の戯作という古い革袋の中に、新時代の世相を盛りこんだのが、「西洋道中膝栗毛」であり、「安愚楽鍋」であった。

そのころすでに福沢諭吉の「西洋事情」や「西洋衣食住」の刊行があったので、魯文は前書を骨子として、外国の模様を描いてゆく（なお魯文は、福沢の「世界国尽」をまねて、「世界都路」明治五年三巻物、という七五調ものも出している）。たまたまこのころ、フランスの万国博覧会を見て、富田砂筵という友人が帰ってきたので、魯文はこの人について、外国の実情などを問いただした。なお二編には、「友人砂燕子先年仏国西の博覧会に至り、彼国の風土大概を得たり。故に彼人の一夕話聊耳底に止めたるを基礎として此書を綴りかけたれど」と、ことわっている通りである。また全篇の所々に

はさんだ、英語の単語や会話の文句も、多くはこの友人から借りたものであるらしい。またそのほか、前から親交のあった、鉄舟、岡丈紀（後に三世紙鳶堂風来と号した）の飜訳、「浮世機関西洋鑑」（三冊、明治六年）などを参照して、「西洋事情」や砂筆の話の欠けているところを、補ったようである。なお実は、丈記のこの作は、明治六年前にすでに出ていた、「西洋道中」の始めの編をまねて、書いたものであるらしい。

魯文の「西洋道中膝栗毛」をくり返して読んでみると、途中の港々や船中で、弥次・喜多八のとばす滑稽諧謔は、単なるくすぐりの域を脱して、当時の渾沌たる開化期の世相に対する、作者の鋭い諷刺や皮肉の含まれていることも、また見逃すことのできない事実である。しかし新しい世相に対しては、所詮一九式な古い見方を離れないし、新時代の西洋文化に対しても、伝統的な解釈しか与えていない。つまり魯文は、新しい題材に対して、古い江戸人としての観察しかできなかったのである。しかし当時の一般の開化人のように、西洋に対する心酔一点張の見方とは違って、おもに滑稽本の伝統にたったなぐさみ本位の立場から、開化の世相を諷刺し、茶化してゆくのである。大体からいって、魯文の作品には諷刺的な意味を、中に含んだものが多いが、果して魯文自身は、その諷刺の真の意味を自覚していたであろうか。明治開化期という千載一遇の新時代に生れあわせ、江戸作者としての教養をもっていたために、際物作者として終始した魯文は、このような一種の諷刺的な風格が、巧まずして自然に作品に漂った、とも考えられるのである。そしていま際物作家といったが、同じ際物でも「西洋道中膝栗毛」は、結局空想の産物であるから、写実的という点では、「安愚楽鍋」におよばないのである。なお参考までにいうと、「西洋道中膝栗毛」初篇の稿料は、一篇につき十円であった、といわれるから、当時としては非常な好遇であったことがわかる。（魯文の弟子の一人、野崎左文の書いた「私の見た明治文壇」春陽堂版昭和二年参照）

明治六年魯文は、横浜の元弁天に引越して、時の神奈川県令大江卓にあげられて、しばらく県庁の雇員となり、民情視察員という肩書で、教育関係の仕事をして県下を遊説したが、やがてこれを辞した。この時の笑話に、ある時魯文が田舎を廻って教育談を一席ぶった折、後で聴衆が、「あんな戯作者に教育談をやられては困る」という批評をくだしたのを、耳にして、赤恥をかいた、というのがある。そして横浜毎日新聞社の雑報記者となり、さらに居を桜木町に移した。しかし八年十一月には同社を辞し、「仮名読新聞」を創刊して、みずから主筆となった。なおこの時の月給は四十円であった、と伝えられる。これは、「かながき新聞」という題の、四頁からなる日刊新聞で、なかなか売行がよく、そのころ東京で発行されていた「読売新聞」および、「平仮名絵入新聞」とともに、世人の人気をさらっていた。そしてこれは、内容からいって、小新聞の系統に入れてよかろう。市井の雑記や花柳界、演芸界の記事を主とする新聞を、小新聞とよび、政治・社会問題を取り扱う大型の新聞を、大新聞とよんだ。当時文筆だけでは食えない戯作者にとって、小新聞は大切なドル箱であったのである。そして魯文は、九年には横浜の野毛山に窟蛾蟻庵という家を設けて、新聞縦覧のための休憩所とし、後妻のため女にこれを経営させた。そして十年には、京橋弥左衛門町に、「仮名読新聞」を移したが、後さらに新富町六丁目に、土蔵づきの一家を構え、「いろは新聞」へ勤めることになった。このころが、魯文の一生を通じて、もっとも得意の時代であった、といわれる。

この「かながき新聞」には、いろいろの特色があるが、「猫々奇聞」という欄をもうけて、魯文はみずから猫々道人と号し、当時の芸妓のアラ探しをやったことは、有名である。そしてこれは、「かながき新聞」の後をうけて、十四年から出た「いろは新聞」の「猫晒落誌」欄に、つづくものである。そしてこれは、ただに花柳界を騒がせたばかりでなく、紳士、学者、書生などにも愛読されて、魯文の文名はますます世に、もてはやされるようになっていった。また別に、和堂

開珍という戯名で、「魯文珍報」という雑誌も編輯した。それからこのころ新富町の新富座の南寄りに、仏骨庵という草庵をいとなんで、仏像仏器類を愛玩し、みずから玩仏居士と称したこともある。そこで「猫々奇聞」であるが、「猫」とは芸者のことである。当時の新東京は、官員と書生の都であったが、江戸以来の芸者が狭斜の巷に君臨し、落籍されては椿妻となり、はては大臣大将の夫人となって、社交界に活躍した。元来江戸の柳暗花明の街は、北郊吉原であったが、芸者の進出によって、天明以後もはや吉原は、江戸の粋客を独占することができなくなっていた。つまり吉原の花魁に代って登場したのが、明治の芸者であって、この芸者を離れては、明治初期の文学は語れないのである。そこで芸者を猫と呼んだわけは、成島柳北の書いた、つぎにあげる猫塚の碑文にもあるように、通説では、猫が艶で柔媚、人にこびたわむれ、皮は三味線になるので、これを商売道具とする、艶媚な芸者の呼名としたわけである。なお一説には、明治初期に来朝した清の公使や粋客たちが、芸者のことを筆談で、「妓」と書いた。これは、昔は「バウ、ボク」で、「みめよし」の義である。ついでに、閩（いまの福建省）の人は、妓女のことを方言で、「妓」と呼んだそうである（閩人謂妓女為妓）。ところで日本人は、この「妓」の字を、「猫」の字と間違えて、いつしか芸者のことを、「ねこ」と呼ぶようになった、という別説もある。それはともかくとして、魯文は、猫々道人のほか、金花猫翁とも号して、猫（芸者）に筆誅を加えることを度重なるので、その罪滅しに猫塚を建てることを、思いたつようになった。それでまず金算段に、十年七月両国の中村楼で、珍猫百覧会という書画会を開いた（野崎左文、上掲書参照）。これは、集会者二千名におよび、すこぶる盛会であった、といわれる。このようにして、猫塚は、魯文の菩提寺である、谷中の興福山永久寺に建立された。碑に録された、成島柳北撰の碑文は、明治初期文学の重要資料の一つとなっているから、つぎに掲げておく。なお読者の便をはかって、送仮名、返点をつけておく。

猫塚の銘碑

生ニ生於両間一之動物、何限焉。其霊而神、若ニ麟・鳳・亀・龍一、聖人猶崇レ之。其美而妍、若ニ錦鄒・白兎・金魚一、人皆奇而愛レ之、今古一也。余友仮名垣魯文翁、独以レ愛レ猫称。世人之相語、事若及レ猫、則曰、告ニ諸魯翁一有レ書画・器玩形ニ于猫一者、則曰、贈ニ諸魯翁一翁遂自号、曰ニ猫猫道人一。然翁実非ニ愛レ猫者一。其所レ刊新聞紙、日録ニ猫之説話一者、何也。蓋猫獣之至柔媚者也。而世之清レ声、便レ体、鼓ニ猫皮一而侍レ客者、其柔媚或有ニ甚レ焉者一。翁不レ払ニ他人之髯一。以ニ麝煤・鼠尾一、餌レ口。其憎レ之、不ニ亦宜一乎。今茲戊寅七月、翁語レ余曰、吾毎叱レ猫鞭レ猫。而猫未ニ嘗反噬一。仏氏曰、狗子有レ性。有ニ仏性一、猫亦或然乎。吾欲レ為ニ築一冢于浅草公園一、以弔而祭レ焉。敢問、祭レ猫礼乎。余対曰、礼也。郊特牲云、『古之君子使レ之、必報レ之。迎レ猫為ニ其食ニ田鼠一也。』迎而祭レ之也。唐礼儀志亦云、『祭ニ五方之山林・川沢一。又祭ニ五方之猫・於菟及龍・麟・朱鳥・白虎・玄武一、各用ニ少牢一。』然則猫之可レ祭也、与ニ四霊一何択。翁欣然乃、請ニ余銘ニ于其碑一。銘曰、

宣尼泣レ麟　心豈在レ麟　猫兮猫兮
祭レ諸如レ神　魯翁有レ心　忖度無レ人

明治十一年戊寅七月　柳北成島弘撰　桂州勝信平書

いま簡単に注釈を加えておくと、両間は天地、猫は猫と同じ、世之清声便体鼓猫皮而侍客者は芸妓、麝煤は墨、鼠尾は筆、反噬はかみつくこと、仏氏は仏教を信奉する者、一冢は一つの塚、郊特性は「礼記」の一章の名、礼儀志は礼法を書いた典籍、於菟は虎、朱鳥は朱雀、玄武は亀、少牢はいけにえにする羊と豕、四霊は麒麟・鳳凰・亀・龍、宣尼は孔子、麟は聖人が天子の位につくと現われるという霊獣のことである。

なおこの猫塚と関聯して注目すべきものに、「山猫めをと塚」というのがある。これも谷中の永久寺にあり、友人福地

桜痴が筆を揮っている。碑の表には、

明治十四季十月建

山猫めをと塚

桜痴居士源書

とあり、裏にはつぎの碑文がある。これも、送仮名と返点をつけて示すと、つぎのようになる。

榎本武揚君、嘗賜ニ雌雄ノ山猫ヲ于猫猫道人魯翁一。該猫病而斃矣。茲贈ニ標石一基一、聊表ニ追悼之意一。嗚呼、　桂州生書

とあり、碑の下の方に、建立者遊食連の名前を一段にかかげている。

遊　竹内　一　清水晴風　池内岡田　大鬼山人

食　渡辺守一　石田喜逢　葛飾文彦　柳亭燕枝

連　染谷藤七　邨越滄川　清水小光　河合寸州

鈴木雅楽　松本芳延　二見朝隈　鹿　山人

明治十四年十月建

とある。つまり時の大臣（海軍卿）榎本武揚が、魯文に番いの猫を贈ったが、それが死んだので、遊び仲間が碑を建てた、というわけである。

さて、話が多少前後するところもあるが、魯文は十二年に「格蘭氏伝倭文雪」（三冊。米国前大統領グラント将軍が、明治十二年七月来朝したので、芝離宮に迎え、上野公園で盛大な歓迎会を開いたが、それを当てこんだ際物作）、「高橋阿伝夜叉譚」、十三年には「恋相場花王夜嵐」などを、つぎつぎに出していった。これらは、五年に出した「倭国字西洋文庫」

とともに、魯文の際物作家の面を、よくあらわしている。このように、外国人を題材とした際物が、いくつかあるのは、「西洋道中膝栗毛」を書いて、西洋をのぞこうと努めた魯文に、ふさわしい特色である。すでに魯文は、「西洋道中」五篇の序文で、

「……目今の新聞は、訳文の一夜漬に記載たりナ。なかよながゝたアれムり升ウ、魯西亜の国帝、亜細亜半界の大立者、「ペイトルヒュルグ」（人名）に次て英吉利女王の立阿山、倶に富強の評判高く、仏蘭西国の一世帯、「拿破崙」（人名）の荒事に、欧羅巴洲の、対陣敵国を聶かせしも、大詰の一戦場に、人気を失ひ、政令統轄の「華盛頓」（人名）は、合衆国の、土豪良民を喝采と誉はせ、各部の最屓連中に、イヨ大統領と称せらる……」

というように、外国の地名人名を巧みに織りこんだ、戯文を草している。そのほか、前にあげた、高橋お伝のほか、夜嵐お絹のような毒婦を好んで取り扱ったことも、彼が抜目なく世人の好尚に追随していった、際物作者の本領を、よく示すものであろう。

さて魯文は、両国の広小路に「いろは新聞」（京文社発行）を始めたと述べておいたが、十四年にはこれをやめて、十七年には、のちの「都新聞」の前身で、小西義敬の率いる「今日新聞」の主筆となり、主として続き物に健筆を揮ったが、後故あって、十九年にはこれを退社した。そして今度は、「東京絵入新聞」に入社した。この時魯文は、年すでに五十八歳であった。そして滑稽酒脱の筆で、ジャーナリズムの流に乗って縦横に活躍したが、一方においては、渡辺文京、胡蝶園若采、広岡柳香、野崎左文、富田一筆庵、三浦百六斎、斎藤真猿を始め、多くの門人を取りたてていった。このほか別に、「いろは連」と称する門弟の一団もあって、その数は四十七名にはみたなかったが、清垣平文（清水晴風）、荒垣痴文（柳亭燕枝）、蘭垣芋文（全亭おろか）、歌垣和文（三世歌川広重）、稲垣住文（竹柴金作）、柴垣其文（四方種彦）、

小手垣味文（村越滄州）、神垣茂文（内田茂三郎）という、錚々たる連中がいて、いずれも師匠の姓名の一字づつをもらって、「○垣○文」と号していた。なお、斎藤緑雨も、魯文晩年にできた、最後の弟子の一人であった。それで、三世柳亭種彦こと、高畠藍泉の率いる柳亭派に対して、仮名垣派ともいうべき、一派の総帥となったのである。しかしこのころ息子の熊太郎が、小笠原で客死したので、その落胆のためもあって、魯文は間もなく、絵入新聞社を退いてしまった。以後はひたすら新富町の自宅にこもり、二十三年両国の中村楼で、盛大な名納会をもよおして、文壇を退いて、半世紀以上にわたった文筆の生活を捨てることになった。そして二世花笠文京などとはかって、師匠の一世花笠文京の碑を、向島の木母寺に建てた。これで師匠への義理を果した魯文は、しばらくは京・大阪などに遊び、悠々自適の生活に入り、また乞われては、都々逸の選者を引きつけたり、いろは連たちに囲まれて遊んだりして、老後を楽しんでいった。それもつかの間、二十五年ごろから脳充血が重くなり、二十七年（一八九四年）八月からは、枕もあがらず、ついに十一月八日新富町の自宅で、世を去った。時に、六十六歳であった。辞世の狂歌に、

快よく寝たらそのまま置炬燵
　　生けし炭団の灰となるまで

とある。葬式の当日、法名について家人が相談中、孫の文造が、「お祖父さんが、地獄へ遊びにゆく時の名前だ」といい残した、枕上の扁額のことを思いだした。それは、朝鮮の志士金玉均の書いた、

仏骨庵独魯草文

という、唐紙に題したものである。そこで即座にこれに居士をつけて、戒名とした、と伝えられている。墓は、谷中三崎町の永久寺にあり、墓碑の右側面に、

「韓人金玉均書　仏骨庵独魯草文」

とあり、左側面には、

「遺言本来空財産無一物　俗名仮名垣魯文」

と記されている。この墓は生前すでに、魯文みずから建てておいたもので、家人はもちろん、寺僧さえ知らなかった、といわれる。このことといい、戒名のことといい、実に戯作の趣向を地でいった、綺人たる魯文の面目躍如たるものがある。なお「早稲田文学」（明治二十七年十一月号）には、「仮名垣魯文氏逝く」と題して、

「合葬者は紳士、紳商、新聞記者、狂言作者、落語家等無慮一千名なりき……」

というように、すこぶる盛大な葬儀であった。

ここで魯文の作家としての生涯を、ふり返って考えてみると、結局は際物書きの連続にすぎなかった、といえるのではあるまいか。そして大体からいって、際物作家には、確固たる信念はなく、また思想の深さもないのが、通例である。ただひたすら流行を追い、世間の好尚に追随するのみである。それで、世人の人気に投じることを、これ心がけるようになる。この点は、魯文の際物作にも、あらわれている。それはともかくとして、魯文の死をもって、本当の意味での滑稽本の伝統が断ちきれたことは、注意すべきことである。また、江戸以来の戯作形式をうけつぐ、旧小説の伝統も、魯文の死をもって終ったのである。魯文が、江戸作者の最後の偉大な光輝を放つ光明、といわれるのは、そのためである。結局魯文は、旧代の型の作家としては、すぐれた才能を示すが、明治新時代の作家としては、無自覚な諷刺的意義をもつ作品を生んだ点で、わずかに新時代の作家としての意義を認めることが、できるのみである。ゆえに魯文は、一代で終り、その後の新しい作家に対しては、あまり影響を与えていないのである。

なお最後にまとめとして附け加えておくと、「西洋道中膝栗毛」の結構については、すでに述べておいた通りであるが、登場人物の性格については、弥次・喜多と通次郎のことを述べておいただけであった。弥次・喜多は、開化期における江戸ッ子の生き残りの最後の者としての性格が、全編にわたって、強く描き出されている。そして編を追うて、その性格が巾をもつように、しくまれている。したがって弥次・喜多を離れての「西洋道中膝栗毛」というものが、考えられないような仕組になっている。各港々や船中における滑稽の一駒一駒は、いずれも茶番的な寸劇ではあるが、この笑劇を一貫して、文明開化に戸惑った生き残りの江戸ッ子の姿が、生々と描き出されてゆくところに、「西洋道中」の一貫性がある。この点は、同じ道中物でも、一九の「東海道中膝栗毛」とは、ちょっと趣向が変っている。一九においては、各宿場宿場における、弥次・北八の演じる寸劇は、おのおの独立性が強く、弥次・北八という同一人物が終始一貫して、これを演じないでも、よいのである。一九は、各宿場の笑劇的場面を統一して、東海道五十三次膝栗毛という一つの枠の中に収めるために同じ人物を登場させて、小説としての一貫性を持たせたものである。このように、魯文と一九において、同じ登場人物を使いながらも、筋の一貫性のとり方に、大きな違いがあるのは、開化期における一般大衆の不知案内の西洋漫遊と、江戸爛熟期における万人衆知の五十三次の旅という、この時代と場面という二つの違いから、来ているものと思われる。五十三次の各宿場の笑劇では、つなぎ役の人物がいなくても、読者にはすでにそれだけで、身近い感興をわかせるのに充分であった。つまり弥次・北八は、その寸劇を縫ってとじあわせてゆく、糸の役目にすぎないのである。しかし魯文の「西洋道中」では、一九以来皆さまご存知の弥次・喜多そのものを登場させることによって、読者を不知案内の外国に連れてゆき、そこに展開する寸劇を、いっしょに楽しもう、という趣向になっているのである。

それから、「西洋道中膝栗毛」における登場人物という問題で、もう一つ注意すべきことは、魯文が抜目なく、当時の

各方面の有名人の名前を、ちょいちょいあげて、引合いに出していることである。これは、話の筋とは、なんの関係もないことであるが、いまから考えると、明治初年の文化史的絵巻という点で、資料の重要性を著しく増してくる。この点では、人物にかぎらず、客席・貸席・料理屋を始め、当時珍らしかった輸入品を始め、そのほか開化の新しい世の中になってできた、品物などの名前が、いろいろと出てくるので、当時の大衆に対しては、開化の相を写しだして、大衆に教えてやる、一つの窓となったのである。また、いまのわれわれにとっては、明治文化研究上、生きた重要な資料となってくる。また前に述べたように、芸者を「猫」と呼ぶほか、九代目のことを「団洲」、新史劇を「活歴」と命名したことも、よく世間に知られている。

この点は、言語の方面でも同じで、江戸ッ子のたんかのよい話し振りを、神明前、東京等々と、振仮名を使って、もっとも写実的に現わした、ほとんど最後の資料として、近代国語史研究上、得がたい文献となっている。ことに、七編上の序に添えた、「仮名違片言附、訛語雑字借用集」は、特に注意すべき資料である。一生一代（いっせう）、委細（いせへ）、笹棒（べらぼう、べらんめへ）、燈心（とうすみ）等々、これについては、稿を改めてくわしく論じることにしよう。この点で注意すべきは、当時は文章というと、「太政官日誌」式の漢文読み下し的の、むずかしい文章が、一般にも行われていたが、元来草双紙の作者であった魯文は、平俗化の秘訣をよく心得ていたから、平仮名本位の読本や新聞紙を出して、福沢などが始め主張した、漢字節減論に藤ながら、声援を与えたことである。このようにして、後の口語体新聞紙の先駆となったことも、見逃すことのできない、魯文の功績である。

また当時洋学は、蘭学から英学へ移ってゆく過渡期であったが、魯文の作品でも、仮名がき英語がよくでてきて、英語の吸収されてゆく跡が、しのばれて、面白い資料となってくる。単語は別として、会話として使った文形式の仮名がき英

語は、全篇を通じて、三十五回も出てくる。各単語の発音の点では、蘭学的英語の臭みがかなり残っているが、連語形式（文構造）としては、大体からいって、みなりっぱな英語であり、砂筵や通次郎などの使った、当時の英語の程度を知る、有力な資料となっている。実は魯文も、すでに横浜時代から「ちゃぶや英語」の学習はすこし試みたらしく、その後彼自身、「訓蒙倭リードル」、「洋名漢字通」、「英語いろは部類」、「洋学進書」（三発）などの著作がある。これらについては、またくわしく論考することにして、いま「西洋道中膝栗毛」の中に現われた、仮名書き英語を、二、三あげておくと、

通次郎「セル。アイ。ポウル。ユウ。オウト。・エ。ガラス。オウ。ワイン。（三編上、英語の綴字になおすと、Shall I pour you out a glass of wine？ というわけ）

異人「ホワイ。ドウ。ユウ。ヒユシ。ミー。（五篇上、これは Why do you push me？ というわけ）

龍動の巡査「ホワイ。アール。ユウ。オルキング。セイル。エト。サーチ。レイト。クイ。（十四篇下、これは、Why are you walking there at such late time？ というわけ）

そのほか、魯文の書きぶりと、十二篇上以後をうけて続けた、総生寛の書きぶりとの比較という問題もあるが、総じて代作という点では、よく魯文の筆癖をのみこんで、まったく同一人の筆になるかのように、うまく書かれているから、まずは上出来というべきであろう。いま魯文の筆癖といったが、それはとりもなおさず、大体からいって、江戸一九以来の滑稽本を主とした戯作物の書きぶりということになるので、当時の戯作者の一人である、総生寛にとっては、これはそれほど難しい仕事ではなかったものと、思われる。いずれにしても、全十五編三十冊が、弥次・喜多八によって統一された、一つの膝栗毛物になって、当時の一般大衆に対し、明治開化期の実情を示す鏡となり、さらにまた、大洋を越えた西洋をのぞかせる、窓となったことは、明治文化史上、「西洋道中膝栗毛」の価値を、一段と高いものとする、と思われる。

附記

一、魯文の作品表は略す。

二、魯文の伝記については、「翁自筆の小伝」と、「遊京日記」などが、もつとも確実な資料となる。ともに、魯文の弟子野崎左文著「私の見た明治文壇」に收められている。また同書には、魯文の旧稿本に基いて書いた、「稗史年代記」の一部も收めてあるが、これも有力な資料となる。その他いろいろあるが、略す。

三、魯文の作品研究の書名も、略す。